

シューマンと共に嘆き、喜び、悲しまないと、とってつけたような音楽になってしまいます。どこかなりふりかまわずやらないと……。

西原:ドライで割り切れる人はシューマンには向かないかもしれません。どこか割り切れないところを楽しみ、浸れる人こそシューマンはあっています。そうだ、シューマンの愛読書だったジャン・パウルの小説『生意気盛り Flegeljahre』がすごく面白いんですよ。ひとつひとつの言葉が細胞分裂して、それがイマジネーションをつくっていくんです。ストーリーや使われている言葉は単純なんです、とてもロマンにあふれた物語です。

仲道:シューマンの音楽そのもののようですよね。そして、彼の中にある二面性が形をとって、フロレスタンとオイゼピウスという人格が生まれていくのですよね。“揺らぎ”といえば、テンポの揺れもシューマンの音楽の重要なポイントですね。「rit.」など指示はいろいろとあるけれど、書いていないところも私は相当にやっています。書いていないからと言ってそのまま弾いてしまうと、見逃してしまう様々なニュアンスがあまりにも多いですから。音色だけではなく、フレージングも。これは心の揺らぎを扱っていますよね。心の揺らぎは決してまっすぐそのまま進めるものではありませんから。ちょっと揺れては立ち止まってみたり……。《ピアノ・ソナタ第1番》も、そのままリズムパターンの繰り返しをするだけでは何も

伝わりません。様々な意味づけをして、それこそシューマンの言葉に耳を傾けて、「こうよね」とか「こうだったのよね」と共に語る感覚を探さないといけないです。

西原:常に移り変わりますからね。1段目と2段目、そして3段目の動機が全然違っていますから、ソナタ形式の観点から分析すると、全く正しい書法とはいえないのですが、それが彼の万華鏡のような音楽を作り出している……。

仲道:それにハマってしまうと、シューマン以外考えられなくなってしまう(笑)。
〈予言の鳥〉も、不可思議なリズムだったり、一拍目がどこかよくわからなかったりと、揺れ動く作品ですね。不安感にあふれた主部と中間部の美しさの対比の在り方からは、シューマンの特徴がとてもわかりやすく聞こえてきます。

西原:シューマンは1830年代に作曲した《ダヴィッド同盟舞曲集 Op.6》や《ピアノ・ソナタ第3番》を50年代に改訂するのですが、それはあまり面白くなくなってしまうんですよ。これまで見てきた“揺らぎ”がなくなってしまうんです。初稿のほうがずっと面白い。

仲道:私は初稿と改訂版を折衷して演奏しています。

西原:それがいいんです。

小説の世界観とか神秘的なものを感じますし、今まで見たことのない、経験したことのないような空気を感じるんです。まるで心の冒険をしているような……。そして、最後には、結婚式の鐘とお葬式の鐘が同時に鳴る。なんと哀しく美しい世界でしょう。
シューマンの夢には、現実と幻想とが入り混じっています。前向きな気持ちと不安な気持ちも同時に存在します。限りなく美しいもの、世界へ憧れながら、それは手に入らないものなのかもしれないという諦め。そう、夢と諦めが同時に存在するのだと思います。
でも、夢を見続けようとするシューマンという一人の若者の物語。その物語が、私たちの心を飛び立たせ、私たちそれぞれの夢の世界へと誘ってくれる。そして、そこに、もしかしたら、忘れてしまったかもしれない、どこかへ置いてきてしまったかもしれない、青春の甘さと苦さをもう一度、更なる輝きのもと味合わせてくれる。言葉でうまく表せませんが、その様な“夢”をお感じいただけたらと思います。

◆音による物語、シューマンの夢

——最後に、今回の「シューマンの夢」というテーマは、どのような意図なのでしょうか。

仲道:シューマンは常に深く物事に向きあった人だと思います。ですから、愛や希望というものがどういふものなのかについても、ものすごく深く考え、悩んでいたのだと思います。その道筋を音楽として形作っていくから、音による“物語”を聴いているみたいな感覚になるのですね。《幻想小曲集》などはまさにそれだと思います。シューマン自身、この作品は音楽による文芸作品だと語っています。文学には、主人公が設定されますが、音による物語では、聴いている人、弾いている人、それぞれ自分が主人公になれるんです。〈夕べに〉ではどんな空気が流れて、どういう色調の空なのかを想像できるし、〈飛翔〉ではこの曲と共に喜んだり、羽ばたくことができ、〈なぜ〉では、自分の中にある問いを投げかけることができる。1曲1曲の中に、ロマン派の時代の

[ゲスト] 西原 稔(にしはら みのる)

桐朋学園大学教授、音楽学。山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。現在、桐朋学園大学音楽学部教授。18,19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。著書に『音楽家の社会史』、『シューマン 全ピアノ作品の研究 上・下』、『ピアノの誕生』、『楽聖ベートーヴェンの誕生』、『ブラームス』、『クラシックでわかる世界史』、『ピアノ大陸ヨーロッパ』、『聖なるイメージの音楽』、『クラシックほんとうの話』など。

[ききて・構成]長井 進之介(ながい しんのすけ)

ピアニスト、音楽ライター。国立音楽大学ピアノ科卒業、同大学大学院伴奏科修了を経て同大学院博士後期課程音楽学領域単位取得満期退学。カールスルーエ音楽大学に交換留学。演奏活動と共に、2007年度〈柴田南雄音楽評論賞〉奨励賞受賞を機にライターとしても活動。『音楽の友』など複数の音楽雑誌で執筆中。インターネットラジオ番組「OTTAVA Fresca」(木・金曜日9:00-12:00)プレゼンターも務める。著書に『OHHASHI いい音をいつまでも』(創英社/三省堂書店)などがある。

発行：有限会社 オフィス・ナカミチ 制作：株式会社ジャパン・アーツ 編集：北川由子(有限会社オフィス・ナカミチ)
無断転載・複製・複写を禁じます。

Road to 2027 仲道郁代 楽曲探求 対談集 Vol.4

仲道郁代 × 西原稔 シューマンの夢

2019年10月27日(日) 東京文化会館 小ホール

オール・シューマン・プログラム
アレグロ ロ短調 Op.8 幻想小曲集 Op.12
《森の情景》より第7曲〈予言の鳥〉Op.82-7
ピアノ・ソナタ第1番 嬰へ短調 Op.11

ききて・構成：長井進之介



◆形式を超えてしまうもの

——「仲道郁代 Road to 2027 プロジェクト」のピアノリズムの新境地に挑むシリーズ。第2回となる今回は、オール・シューマン・プログラムということで、初期の作品を中心にあげていっしょういします。最初に演奏される《アレグロ ロ短調 Op.8》はあまり演奏されない曲ですが……

仲道:もともと《ピアノ・ソナタ第1番 嬰へ短調 Op.11》を軸に考えたプログラムなのですが、《アレグロ》には最初から《ピアノ・ソナタ第1番》に近いものがあるのを感じていたんです。弾いていて、とてもマッチする感覚があつて。なので感覚的に《アレグロ》を置いていたのですが、西原先生のご著書『シューマン 全ピアノ作品の研究』(音楽之友社)に、《アレグロ》と《ピアノ・ソナタ第1番》は深く関係がある、と書いてあったので驚きました。

西原:そう、《アレグロ》は《ピアノ・ソナタ第1番》の出発点にあたる作品なんですよ。ここで試みたことがソナタに活かされていくんです。

仲道:確かに《ピアノ・ソナタ第1番》の中には《アレグロ》と似たメロディやフラグメントがたくさん出てきます。先生のご著書

を拝読したら、これまで感覚でとらえていたシューマンの作品の様々な側面や時代とのかかわりがストンと身体に落ちる感覚がありました。

仲道:《アレグロ Op.8》を弾いていると、《ソナタ第1番》との関連はもちろんですが、《謝肉祭 Op.9》とのつながりも見えてきます。《アレグロ》のモティーフとなる音型には《謝肉祭》に出てくる「スフィンクスの音型」との関連も感じます。謎解きのような観点やメッセージがあつたのかなと。彼の音楽は他の作品たちとも深いつながりを感じさせますね。
ちなみに、このソナタや《アレグロ》はフンメルのソナタのモティーフも使われていますよね。もしこれをベートーヴェンが素材として作曲していたら、もっと巧妙に構築してソナタを書いたと思うんですが、シューマンは緻密に展開させようとする意志は見せつつ、最終的には旋律性を重視していますね。

西原:引用したモティーフを第1主題、第2主題、さらに展開部にもそのままもってきていますからね……。モティーフの扱い、というよりもやはり作品の裏に込められているであろうことを想像して演奏する方が重要になってくるでしょうね。

仲道:私もそう思います。
《ピアノ・ソナタ第1番》は、クララの作品からの借用も含まれていますね。彼らは恋愛関係になる前から、音楽的なつながりをもっていたのでしょうか。

西原:クララとの関係は恋愛を超えたところにあるのですごく複雑になっています。シューマンはたびたびクララの書いたテーマを作品の中に取り込んで作曲していたりしますからね。《ピアノ・ソナタ第3番 へ短調 Op.14》の第1楽章も冒頭の下行音型で開始しますが、この音型はクララの《音楽の夜会 Op.6》の第2曲〈ノットウルノ〉からの転用だといわれています。さらにこの音型はシューマンの《幻想曲ハ長調 Op.17》の

主題とも共通していますよね。おそらく二人の間には大きな“合作の輪”みたいなものがあるんじゃないかなと。そして様々な楽曲がその“輪”から生み出されているんじゃないかと思うのです。

仲道: シューマンがそれを音楽にすることで、言葉のように深く伝わるものがあったのでしょうね。ただの引用じゃなくて、特別なメッセージのようなものなのではないかと考えてしまいます。

西原: 秘められたメッセージといえば、例えば《幻想小曲集 Op.12》の第8曲〈歌の終わり〉について、これを聴いたクララがシューマンに「あなたはツムシュテークの歌曲を聴いたのですね」と書いているのですが、そうしたらシューマンは「よくわかりましたね、ほめてあげましょう」という手紙を返しているんです。

仲道: 影響を受けた歌曲があるのですか？



◆シューマンの曖昧さ

——シューマンはよく曖昧だとか、わかりにくいと言われることがありますね。

西原: シューマンは他の作曲家のように、分析したらわかる、と言うものではなく絶対わからないところがあるんです。例えばブラームスは80パーセント理屈でわかるところがありますが、シューマンは少なくとも70パーセントはわからない。つまり3分の1くらいしかわからないということで、もやもやの中にあるんです。《ソナタ第1番》だって普通のソナタ形式にあてはめては分析できません。

仲道: 次から次に色々な要素が出てきて音楽が展開していきますからね。その次々現れる想いを楽しみましょう、という感じで、理屈で割り切れないところがある。そこが素晴らしいんです。その曖昧さこそを楽しんで頂きたいと思っています。

西原: 全くそうですね。本当にその理屈で割り切れないところにシューマンの美しさが詰まっているんです。

仲道: 私ね、シューマンの作品を弾いていると、やっぱり恋人にするなら絶対シューマンだなあって思うんです。あれだけの美しい音楽の世界を見せられてしまったら他の人はいらないうてなるんじゃないかしら。だからクララはシューマンの死後誰とも結婚しなかったのだと思うんです。シューマンっ

西原: それがどの曲を指しているのかが現在も全くわかっていないんです。研究者も演奏家も誰も。シューマンとクララの二人だけがわかっていることなんです。

仲道: 二人だけがわかる……それが実際何なのかはわからなくても、秘められた想いを想像して共鳴することはできますし、それがまた楽しいですね。

——シューマンは組曲や性格的小品が多く、あまり形式を重視した作曲家ではなかったように思うのですが、《ピアノ・ソナタ第1番》はかなり形式を意識した様子が窺えますね。

西原: そうですね。動機の統一性を図ったり、歌曲の旋律を引用していたり、明確な形式への意識が見て取れます。これが《ピアノ・ソナタ第2番 ト短調 Op.22》になるとさらに形式美をつきつめていますし、統一感が生み出されています。クララは第2番の方が好きだったみたいですね。クララがシューマンに宛てた手紙の中で、第1番のソナタについて「Wurm(芋虫)が鍵盤を這いつくばるように弾きました」と書いているんです。あのリズムや転調の手法が生理的にあまり好きじゃなかったのかもしれませんが。自立した女性であり、白黒ははっきりして、モヤモヤのない彼女らしい意見だと思います。彼女の初期のピアノ作品など非常にドライですから。

仲道: 当時のピアノはレペティション(連打)の機能が今のよう発達していなかったので、《ピアノ・ソナタ第1番》はものすごく弾きづらかったと思います。そういうことも関係していたんじゃないかしら……。そもそもシューマンの曲はあまりピアニスティックではないですね。でも、最近私はその不器用さ、形式を超えていってしまうような不器用さの中に、新たな魅力を感じています。

てあまりにも繊細だけれど、あれだけ美しい憧れの世界を見ている人ですから、すごいロマンを見せてくれるんですよね。特に今は私、彼に目がくらんでいるから、本当に彼しか見えなくなっているのかもしれませんが(笑)。

——仲道さんは、シューマンはどんな人だったと思われるのですか？

仲道: 私はシューマンはすごく心の美しかった人だと思うんです。人間ってドロドロとした部分やものすごく暗い部分もあったりすると思うんですが、彼は基本的にすごく明るい人ではないでしょうか。もちろん苦悩はしていたけれど、心根はとても明るいと思えるんです。シューマンの影は、心の奥底の陰陰滅滅とした暗さからくるものではなくて、明るい人が傷ついた、という世界な気がします。明るいが故に、美しいものが好きな故に、繊細なのだと。だから現実と相容れなくてつらいことも多かったと思うし、着いた役職は全うできないし、全くブラクティカルなことが苦手な人だと思うんです。結婚したらクララに1時間しかピアノを弾かせなかったというのも、最初は男の人のエゴかと思ったけれど、きっと違うんですよね。クララに活躍してほしくないとかそんなことではなくて、他の作曲家の作品を練習しているのを聴くのが嫌だったんじゃないかなと。それは、決して他の作曲家への嫉妬からということではなくて、自分の持っている美しい想像の世界に専念して曲を書きたいのに、他の音楽の違うファクターが耳に飛び込んでくると揺り動かされてしまって、自分の世界を守れなくなってしまうから……。それくらい繊細な人なんじゃないかと思うんです。批評をたくさん書いているし、他の

作曲家を応援したりもしているけれど、内実そんな面があったんじゃないかと。弾いていると、どうしてもそんな気が

◆教会の鐘の音と葬式の鐘の音、表裏一体の世界

——その危うい儚さや美しさというのは、特に今回仲道さんがお弾きになる《幻想小曲集》や《森の情景》の第7曲〈予言の鳥〉にも表れていますね。

仲道: そう、特にシューマンの心の中にあるものというのは、《幻想小曲集》第8曲の〈歌の終わり〉に集約していると感じます。これは先生もご著書で書いていらっしゃいますね。

西原: 結婚式で鳴り響く教会の鐘の音と、葬式の鐘の音が同時に響いている、という点ですね。

仲道: そうです！ 対極にある二つの響きが同時に鳴る、というのは、どんなにファンタジックな作品を弾いていても、そこには美しい夢の世界だけでなく、同時にその夢の世界は崩れ去るもの……という哀しみが常に潜んでいるということなんですよ。

西原: 確かに、彼の中には常に二つの矛盾した要素が同時に存在しあっているように思います。

仲道: 特に思春期なんかは色々なことに憧れて、それが叶うのか叶わないのか常に不安になり、とても心が不安定になってしましますが、シューマンはそれを生涯持ち続けた人だと思います。一生青春、というのか……。だからどの曲を弾いていても、“素敵”、“美しい”と感じると同時に“これが崩壊してしまうかもしれない”という恐れもある。でも、崩壊するのが怖くてただ嘆いているだけではないのがシューマンであり、彼の音楽なんですよ。

西原: 確かに、作曲家の作品と哲学は表裏一体といえるかもしれません。

仲道: シューマンは憧れと、それが叶わないという事実を知っていて、相反するその心もちを、危うさを孕んだ美しさとして見せてくれる感じ。例えばベートーヴェンは、憧れと想いが叶わないと知ったときには戦う人だし、シューベルトは憧れが叶わないなら天国にいきましようという感じがある。ショパン

◆シューマンの音楽の“揺らぎ”

西原: 理屈では語れない、というところは拍節感にも表れていますよ。シューマンは1835年以降、拍節を繰り返すときにずらすように書いているので、フレージングもずれていくため、何拍子になっているかわからなくなっていくでしょう？

仲道: そうですね。だからペダリングをかなり工夫する必要があります。例えば《ピアノ・ソナタ第1番》の第3楽章でも、ペダルの位置を少し変えるだけでもニュアンスが全くかわってしまいますから。それがえいわれぬ微細な変化や白黒をハッキリつけない人の感情の曖昧さを見せてくれますね。

西原: 彼の中にある“揺らぎ”が現れているんですよ。ちなみにシューマンの作品の出版譜の中で、ブライトコップフ版に書いてあるペダリングはクララがつけたもので、シューマン

してしまうんです。

は祖国ポーランドへの憧れと今の自分の生活とのギャップを思い嘆き続けているようなところを感じます。作品の裏側に、その作曲家ならではの世界がありますよね。

西原: 〈歌の終わり〉はまさにそんなシューマンのありようを体現した作品でしょうね。彼の「フロレスタン」と「オイゼビウス」もこういう面から派生したものですから。

仲道: それを聴かせてくれるから、涙が出るほど美しいと感じるんですよ。そういうものを聴いていると、理屈で言われてなくても「そうだね……」と、心が震えるような美しさを受け取ることができます。

西原: そういった意味では《ダヴィッド同盟舞曲集》はその頂点にある曲といえるでしょう。喜びと絶望が同居していて……特に最後の曲と、最初の曲でクララの主題の後にあるメランコリーには、なんともいえないものがあります。これは分析してもわかるものではありません。

仲道: 先生もそうおっしゃってくださって嬉しい！ 理屈じゃないんですよ、シューマンは。本人的には《ソナタ第1番》のように、理屈でどうにかしたいと思っていたとしても、理屈を超えてしまっている。



自身はつけていません。だから彼が実際どうペダルを踏むことを要求したのかはわからないんです。

仲道: その“揺らぎ”をどのように読み取るか。シューマンのこの繊細なニュアンスをお客様にお届けするのがピアニストの腕の見せ所です。だからこそ、お聴きいただく皆さまには、そこに身を投じて、シューマンと泣き、夢を見て、その瞬間瞬間に浸っていただきたいんです。

西原: シューマンの演奏は半分カウンセリングのような感覚が必要だと思います。彼の気持ちをよく聴いて、「うんうん、そうだね」とわかってあげるような感覚が(笑)。なにしろ、共鳴しないとまったく別世界で何をやっているかわからないような気分になってしまいますから。

仲道: 本当にそうですね。例えば、ショパンなどは非常に冷静に弾けるんですが、シューマンの場合は、彼の世界に入り込み、